

## 会 員 の 声

### 「会員の声」欄のあり方について

2007年9月発刊の本誌「会員の声」欄に、東京大学教授鈴木謙氏の「魚体へのメチル水銀蓄積経路について—「水俣病の科学」の誤り」と題する文章（以下、投書1とする）が掲載され、最近号（2010年1月発刊）の同欄には「お詫びと訂正」（同、投書2）が掲載されました。

私は、昨年春までこの二つの文の投稿者鈴木氏と同じ東京大学水産実験所に助教として勤務しており、鈴木氏がメチル水銀に関する実験はしていないことを知っていましたので、不可解に思い調べると「水俣病の科学」\*の著者や出版社がこの一文（投書1）を根拠とした攻撃を受けていることを知りました。一連の経過を見ると、ことは「批判的な書評を書いたが、その際うっかりしてミスをした」程度の単純な問題ではなく、水産学会の学問に対する姿勢ひいては社会的責任にも関わる大きな問題であると考え筆を執りました。

詳しくは原著書と著者の1人西村肇氏（東京大学名誉教授・化学工学専攻）のホームページ『「水俣病の科学」は間違いと断定発表の東大農学部教授—学問的詐術を東大に告発、一年の経過と結論』（[http://jimnishimura.jp/tech\\_soc/minamatadispute/minamatadispute.html](http://jimnishimura.jp/tech_soc/minamatadispute/minamatadispute.html)）をご覧くださいの一番よいのですが、以下に概略を紹介します。

「水俣病の科学」は「1954年から爆発的に発症が増加した水俣病の原因であるチッソからのメチル水銀排出について、それがなぜ、どのように起きたのか」について科学的に明らかにした著者らのライフワークと言える仕事です。その中で、著者らはどの程度のメチル水銀排出があったかを当時の数少ないデータから推定するために、まず、水俣湾に来遊したカタクチイワシ（プランクトン食の表層魚）では、環境水から鰓を通じて直接取り入れるメチル水銀の量が餌から取り入れる量より遙かに多いことを考察し、当時カタクチイワシを食べさせて発病した猫のデータをもとに排出量を推定しています。

西村氏のホームページによれば、鈴木氏は、「魚類生理学の専門家として、魚が鰓からメチル水銀を取り入れることは絶対に認められない。」とした発言をあちこちで行い、それを聞き及んだ西村氏が個人的な議論や公開討論を申し出ましたが、それには一切応じず、突然本誌

の「会員の声」欄に投書して、「同書の誤りは明確であり、正さなければならない。魚への水銀蓄積は餌由来である。」と主張しました。鈴木氏がその根拠として計算を示したデータの出典は、普通では入手できない資料であり、しかもその著者藤木氏らの「魚に蓄積するメチル水銀の主要因は海水中に溶存態で存在するメチル水銀である」とする結論を無視して一部のデータのみから逆の結果を導き出し、この際数値を2桁も間違えたわけです。投書1が掲載されてからそれほど経たない2007年12月頃から、この投書を根拠に、出版社である日本評論社には著書の発行停止を、毎日新聞社には毎日出版文化賞の取り消しを求める執拗な抗議・要求がなされました。西村氏は、「結論逆転」と「データの100倍改変」という鈴木氏の論文引用における倫理違反を理由に、投書の撤回命令を東京大学に求めました。大学側は、研究における不正行為（結果の捏造、改竄、盗用）があったかどうかという限られた範囲でしか問題を扱わず、「数値データ引用のあり方が軽率であった」や「研究者の倫理観に問題があったと認識している」としてはいるものの、「不正行為には該当しない」とする「科学研究行動規範委員会」の最終結論を西村氏に送りました。ただし最終結論では、水産学会誌への訂正文の掲載にあたっては、数値とサブタイトルの訂正だけでなく「藤木らの報告」の引用手法が不適切であったことについての説明を含めることとあり、また「投稿記事を掲載した日本水産学会が主体的に科学的な議論の場を設けて収束を図るべき」との付帯意見も述べられています。

投書1の掲載から2年以上が過ぎた後、鈴木氏は投書2で引用データと一部語句の修正をしましたが、引用論文の結論を逆転したことについては変更がなく、「論旨には影響しない」ともしています。「倫理観に問題があった」との結論に対してはまったく言及がなく、無視されています。著者、関係者、日本水産学会および会員へのお詫びの言葉が記されていますが、その掲載文は著者および出版社へは、私がこの原稿を水産学会に送る今日（2010年3月2日）まで届けられていません。

今回私が問題にしたいのは、魚のメチル水銀蓄積について、鈴木氏の主張と西村氏の主張のどちらが正しいかといったことではなく、水産学会誌の「会員の声」欄の使われ方についてです。

鈴木氏はいったい何故、西村氏らの著書を否定する文をこの欄に投稿したのでしょうか？ 再び西村氏によれば、水俣病患者の認定に絡んで、「水俣病の科学」が明

\* 西村 肇, 岡本達明. 「水俣病の科学」日本評論社, 東京. 2001; 「同 増補版」2006.

らかにした汚染の具体的メカニズムが、自分達がそれまで想像してきた説とちがうため、本書に「加害者を利する悪書」というレッテルを貼って敵視する人々がいる、鈴木氏はその人達の期待に応えるために学会誌に投稿した。」としています。

投書1が学術誌に掲載されたということを根拠に、「水俣病の科学」の出版停止や賞の取り消しを求めるといふ暴挙が現に起きていることは事実です。報文でもないはずの「会員の声」欄への投書が、水産学会の名の下に権威付けされて使われているわけです。鈴木氏は水産実験所のホームページに投書1を転載しているだけでなく、東京大学の公式データベースにも「研究業績」欄に総説としてリストアップしており、これも出版停止などの要求に一役かったことは容易に想像できると思います。

「会員の声」欄は、学会に対する意見などを自由に言える場所として用意されたものと思います。西村氏と鈴木氏の主張の違いが仮に純粋に学問的なものであるとしても、一方だけが自由に利用できる場所に、「話題提供」の名を借りてその主張を展開するのは公正なやり方とは言えません。しかもその隠された目的が他者の著書に対する攻撃・否定であるならば、学術誌である水産学会誌の「会員の声」欄をそれに使うことは許されることではないと思います。このような投稿を掲載した水産学会としてさらに考えなければいけないことは、社会的問題に関わる一方の立場の人達に学会誌が利用され、水産学会がそれに加担する結果となっていることです。このまま放置すれば、学術誌としての水産学会誌、ひいては学術団体である水産学会自体が信用を大きく失うことになると思います。 (中部支部正会員 河野 迪子)

#### 「会員の声」欄の終了について

本誌「会員の声」欄はこれまでに一定の役割を果たしたものとして、その終了を平成21年度第7回理事会(平成22年3月13日開催)で決定いたしました。従いまして、今回の記事をもって本欄を閉じさせていただきます。これまでの皆様のご協力に感謝いたします。

なお、会員からの意見は、今後も事務局にお送りいただければ、理事会で報告して対応を検討するなど、本学会の活動に反映していく所存です。